

## 平成24年度第3回 函館市観光基本計画策定検討委員会 会議録

### ■ 開催概要

開催日時：平成25年3月19日（火） 13：30～15：30

開催場所：函館市消防本部2階 会議室

出席委員：木村委員，市根井委員，蝦名委員，黒川委員，田中委員，全委員，西村委員，  
藤森委員

欠席委員：和泉委員，遠藤委員，奥平委員，折谷委員，國分委員，小林委員，中野委員

函館市：観光振興課長

(社)日本観光振興協会：加藤研究員，全研究員

(株)JTB北海道 地域コンテンツ開発室：小林マネージャー

### ■ 次 第

- 1 開 会
- 2 インバウンド勉強会
- 3 再 開
- 4 委員長挨拶
- 5 説 明
- 6 討 議
- 7 委員長総括
- 8 そ の 他
- 9 閉 会

### ■インバウンド勉強会

資料1-1「函館市のインバウンドマーケット（5カ国市場）」，資料1-2「訪日旅行の全体像」，資料1-3「オペレーター調査結果」について，(株)JTB北海道 小林マネージャーより説明。

(木村委員長)

今後の議論の参考となる非常に面白いデータを示していただいた。

次期計画については10年後を見据えて策定していくこととなるが，その先については，青森との連携だけではなく，札幌，ニセコ，小樽との連携も想定しておかなければならないと感じている。インバウンドの観点から，その点に関するお考えをお聞きしたい。

(小林マネージャー)

この先の札幌延伸を見据えた場合、間違いなくそうした議論が必要になってくる。LCCの就航が増えてきていることを考えれば、インアウトが必ずしも新千歳空港である必要はなく、羽田や成田からジャパンレールパスを使って新幹線で函館へ入って来られるようになる。函館からの北上ルートについては、今後しっかりと考えていくべきだと思う。

(田中委員)

日本には修学旅行という文化があるが、台湾の団体旅行の中には若年層だけを対象とした教育旅行のようなものはあるのか。

(小林マネージャー)

あるにはあるが、修学旅行で海外へ行くという感覚が日本ほどは浸透していないので、資料に出ている団体旅行の数字にはほとんど影響を与えていない。

蛇足だが、出国者数がこれだけ多いにも関わらず、団体旅行の割合が依然として高い台湾は、他の国々に比べ特別なマーケットであることがわかる。

(田中委員)

団体旅行が、インバウンドにおける一つの鍵になると思う。

その国との最初の出会いは団体旅行であることが多く、そこから個人旅行へと派生していく。中国の富裕層と言われている人達の個人旅行も、最初に訪れた団体旅行がきっかけとなっており、そのことにもっと着目すべきだと感じている。

また、観光資源の見せ方については、その国に合わせた細かいアレンジが必要になってくると思う。

(全委員)

歴史的建造物を見たとしても、例えば、韓国の旅行者から見ると、600年以上の歴史を持つ韓国のソウル市と比べると開港150年ではやはり歴史は浅いので、日本国内の観光客と同じ感覚で見ることにはできない。相手の国の歴史をもっとよく理解したうえで、函館の歴史・文化が持っている「売り」とは何なのかを考えていかなければならない。

## ■ 委員長挨拶

(木村委員長)

今までの振り返りだが、第1回目の委員会では函館観光の現状の洗い出しについて、第2回目の委員会では「計画期間」、「目標設定」、「観光振興戦略の形成に向けたカテゴリー

り区分」について、それぞれ議論をしてきたところである。

討議の前に、3月14日に開催された「国際観光コンベンションフォーラム2013」の際に発表させていただいた資料を皆様へ配付させていただいた。この会議を通じてわかったことは何かというと、新幹線の新函館開業後が、函館にとっての観光産業の発展の本番になるのだということ。札幌延伸まで20年後と言われているが、その時点のことを想定しながら次期観光基本計画も考えていかなければならない。特に札幌と青函圏とのゴールデンルートの形成がこのあと非常に重要になってくる。

お配りしたもう一つの資料は、観光庁のMICE推進担当参事官の資料である。

面白いと感じた考え方は、個人旅行については、旅行をしようとする意思決定者が多数いるため情報提供はマスメディアによらざるを得ないが、MICEの場合は、多数の参加者がいるにも関わらず、意思決定者はほんの一部しかいないということ。つまり、そこをマーケットして競争すれば、勝った場合、非常に利得が大きいということになる。

観光を函館の産業として捉えていくために、また、これからの厳しい競争を乗り越えていくための基本的な指針とするために、しっかりと計画を策定していかなければならないと改めて強く感じたところである。

## ■ 説 明

資料2「函館市観光基本計画策定調査(案)」について、日本観光振興協会 全研究員より説明。

## ■ 討 議

(木村委員長)

海外からの観光客について、千歳インを前提としたルートを基本とするのであれば、函館の場合、新幹線の札幌延伸までの20年を待たなければならないという話になってしまう。現時点で10年後を見据えた計画を策定するためには、それとは別の考え方を持たなければならない。

その一つのキーとなるのが青函連携。外国の方に函館空港から入っていただいて、青函圏を巡っていただくようなモデルが出来れば良いと考えている。

今回の基礎調査により得られたデータについては冷静に受け止めつつ、これまでの観光の見せ方とは違った奥深い情報発信の仕方についても、しっかりと考えていかなければならないと感じた。

(市根井委員)

海外の方が何を求めて函館へ来るのか。国別にはっきりとフォーカスを決めて情報発信をした方がいいのではないかと。

また、先日、シンガポールの観光関係者と話をする機会があったが、シンガポール、

マレーシア、インドネシアには来訪希望の強い富裕層が多いとのことなので、その方達を取り込む方法をもっとよく考えていくべきだと思う。

例えば宿泊施設などでは、食事の出し方一つとっても国ごとに異なる対応が必要になってくる。そうした課題があることを我々ももっと勉強していく必要がある。特にイスラムの世界にはもっと目を向けてもいいのではないかと感じている。国別、地域別のホスピタリティの型のようなものを意識的に作ってはどうか。

(蝦名委員)

アジアの人々にとって、西部地区の歴史的建造物の認知度は低いということであったが、確かに知らないところを見ても、それほどの感動はないのだと思う。

国内観光客であっても同じことが言えるはず。旅行先で歴史的建造物と言われる建物を見たとしても、街の歴史とセットでなければ魅力には繋がっていかない。個人旅行が増えているので、自分で意識して調べなければ知る機会がないというのは難しいところではあるが、団体旅行については工夫次第でうまく伝えられるのではないだろうか。

また、基礎調査の中で示されている期待度マップやリピート度マップの回答者の属性はどのようになっているのかお聞きしたい。

(全研究員)

日本の人口の構成比に合わせてサンプル数を取っている。調査概要については、最終報告案に明示させていただく。

(黒川委員)

調査案について、コンベンションの部分、MICEの部分についてももう少し記述がほしいと感じた。

前半のインバウンド勉強会でも感じたことだが、やはり国内と海外では函館に対する認知度、印象が異なるので、しっかりと切り分けたアプローチの仕方が必要だと思う。

台湾については定期便の就航があり好調だが、国全体の人口が少ないので、将来函館への旅行需要が飽和する可能性も考えられる。今後を見据え、台湾と繋がっているシンガポールの方達に台湾経由で来たいいただくことなども考えていかなければならないと感じている。

(藤森委員)

今回の調査案については概ねよく出来ていると感じている。ただ、その中でも外国人観光客の受け入れに関する詳細な記述がもう少しあってもいいのではないかと感じていたが、前半のインバウンド勉強会で、ある程度課題というものが見えてきたように思う。

自分たちが良いと感じている点も相手にうまく伝わらないと意味がないので、海外に

向けてのPRの仕方については今後工夫していくべきだと感じた。

さらに、空のアクセスの問題もある。今は残念ながら台湾便しか就航していないので、黒川委員も仰っていたように、今後はしっかりと対策を練っていかなければならない。

また、新幹線の開業により観光客が増えることが予想されているが、函館へ来るために新幹線を利用する方にとっては、新駅から函館市内までのアクセスで単純に乗継が1回増えることになり、それを負担に感じるのではないかと危惧している。そこについては、やはり工夫が必要だと思う。

(西村委員)

先日、韓国の学校の校長先生が、日韓の学校同士の交流を図るための修学旅行の受け入れ先を探しに市内の高校へプロモーションに訪れていたが、今後そうした動きが増えていけば、韓国からの修学旅行の受け入れというのも少しずつ増えていく可能性があるのではないだろうか。

(市根井委員)

4年くらい前に、韓国の高校2校を白百合高校で受け入れたことがあったが、とても良い交流となった。ただ、その時は受け入れ先がなく苦勞されたと聞いている。

(木村委員長)

本日欠席の委員の方からご意見をいただいているので、共有しておきたい。

まず、折谷委員から、函館を選んだ理由のトップが「夜景」であり、次いで「歴史的建造物」、「グルメ」の回答率が高いが、再訪回数によって選んだ理由が異なる可能性もあるので、その点を反映させた調査をしてみてもどうかというご意見をいただいている。

また、類似都市として、小樽、神戸、長崎の観光動向について記載されているが、観光客が、それらの都市と函館市を類似都市として位置付けているかどうかは疑問に感じるとのご意見もいただいている。

類似都市の考え方についてだが、第1回目の委員会でも言及されていたことから、今回の報告では他の地域を含めたマトリクスでの表示が新たに追加されている。小樽、神戸、長崎に限らず、このマトリクスから読み取れる他都市との類似関係については、今後の委員会の中でしっかりと議論していくべきだと考えている。

國分委員からは、インターネット調査により実施した函館に関するネガティブ調査について、過去に函館に来たことがある方からの聞き取りだと印象が美化されてしまう可能性があるため、今現在、函館を訪れている方を対象にグループインタビューなどにより直接対面で聞き取りしてみてもどうか、という意見をいただいている。

また、今後、課題や問題点についてどのように「選択と集中」をしていくべきか、市民の観光産業への期待感はいまだ高いと感じているので、市として明確な「道しるべ」をどういった形でアウトプットしていくかが重要である、という意見をいただいている。

課題に対する「選択と集中」、市民へのアウトプットの仕方については、まさにこれから計画策定の中で我々が考えていかなければならないことだと認識している。

また、和泉委員からは、資料が膨大で論点が見つけにくいといったご意見をいただいている。

本日冒頭の勉強会を含めて、今まで色々な視点からデータを提示していただいたが、それらを踏まえ、今後の委員会の中でポイントをどこに置くべきかを議論していかなければならないと考えている。

これまでの委員会では、膨大なデータを皆様にご覧いただいていたが、この半年の間にも、中国、韓国との外交問題や政権交代による国内の景況感の高まりなど、情勢が次々と変わってきている。そうした状況を考えると、様々な社会の変化に柔軟に対応できるような計画の必要性がより明快になってきたとも言える。

今年度は、函館観光の現状や課題に関する基礎調査ということで、色々勉強する機会が多かったかと思う。

来年度はいよいよ計画策定も大詰めを迎え、委員会の開催回数も今まで以上に増えることとなるが、今後とも引き続き皆様のご協力をお願いしたい。

それでは、本日の討議はこれにて終了いたします。

ありがとうございました。

## ■ その他

(事務局)

本日いただいた意見を反映させたくて、本年度の基礎調査業務は終了とさせていただく。

なお、最終的な調査結果につきましては、現観光基本計画における序章「計画策定の趣旨」、第1章「計画策定の基本的視点」、第2章「函館市の都市形成と特色」、第3章「観光の現況と課題」といった前半部分における骨格として、有効に活用していきたい。

## ■ 閉 会